

論文概要書

加藤時次郎

成田龍一

1207
3

1267
3



No.

No.

論文概要書

如藤時次郎

成田龍一

早稲田大学論文用紙



No. 2

No. 1

一、

本論文は加藤時次郎（一八五八年—一九三〇年）の思想と行動の軌跡をあきらかにする。加藤はすでに搖籃期の社会主義保護者として著名な人物であり、幸徳秋水や堺利彦の週刊『平民新聞』への資金援助、オニインタ―ナショナル第七回大会出席などはよく知られている。近年では、普通選挙運動家の側面（松尾尊兄『大正デモクラシーの研究』）や曾根廻家五郎らを援助した演劇人の側面（松本克平『日本社会主義演劇史』）にも注目されてきた。

早稲田大学論文用紙

しかし、加藤はドクトルとして医療面でも活動し、さらに実費診療所や平民病院などの事業をつうじて都市民衆の救済もおこなっている。これらはいずれも、川上武『現代日本医療史』でわずかにふれられるのみで、ほとんど解明がなされていない。本論文では加藤の都市事業家としての側面に比重をおきながら、彼の活動の全体像をあきらかにする。加藤が生涯



No. 4

No. 3

にわたるおこなった都市民衆救済のための事業の実態を紹介し、彼の社会改良論の検討にまづ論をすすめる。

ここには二つの意図がある。一つは、加藤時次郎の事業の分析をつうじて近代日本都市史へ接近していくことである。近代日本都市の史的考察はようやく開始されたばかりであるが、都市事業の領域から考察をおこなう。二つは、加藤の主要な活躍時期が日露戦争後から「満州」事変前夜にかけての大正デモクラシー期であり、大正デモクラシー運動のあらたな潮流・事例を紹介することである。加藤は初期社会主義者の周辺にいたため、初期社会主義と大正デモクラシー運動の関連をも考察することになる。

早稲田大学論文用紙

本論文は加藤時次郎という一人の人物に照準をあてるが、同時に彼を近代日本社会・都市に位置づけ近代日本都市史・大正デモクラシーの一端をあきらかにする試みである。

なお、本論文では加藤の著作のほか、加藤



が発行した機関誌「くらし生活の力」(一九一四年二月—一九一七年九月)、日平民(一九一七年—一九二五年三月)、日凡人の力(一九二五年四月—一九四三年九月)やパンフレット類を多く用いた。これらは加藤時次郎の御遺族が所蔵されたものがあるが、拙編「加藤時次郎選集」(副論文として提出)として刊行されている。

二、

早稲田大学論文用紙

加藤時次郎は一九一五年一月一日、豊前国田川郡香春村(現在の福岡県香春町)に吉松元簡・きくの次男として出生した。父元簡は代々医を業とする吉松家へ養子にきくいたが、時次郎は父の影響で幼小より医師たることを志す。しかしこの時期は日本の医学教育体系や医制が整えられる時期のため、その足跡は変遷を重ねている。

加藤はまず、伊藤俊明、村上仏山の塾に学び、長崎医学校でドイツ学を学ぶ。一八



No. 8

No. 7

七五年には東京へ出て、壬申義塾・外国語学
校でドイツ語を学び、警視医学校に入学。同
校が廃校されたため東京大学医学部予科三級
に編入したが退学、いくつかの病院で勤務を
しながら医術開業試験の予備校済生学舎に通
い、一い三年に医師の資格を得た。これと
相前後して時次郎は薬問屋加藤万兵衛・サダ
の婿養子となり、ここに医師加藤時次郎が誕
生した。

苦勞して医師となつた加藤は單に患者を治

早稲田大学論文用紙

療するだけの医師ではない。技術として医術
を切り売りするのではなく、広く社会へ眼を
むけるのがかりで医療を考察した。病氣は
貧困やそのゆえの衛生環境の劣悪・衛生思想
の欠如と密接な関連をもち、一旦病氣にかか
れば高額治療費のため治療を受けえぬのみな
らぬ収入の途絶をきたし一家没落の悲劇をお
こす。加藤はこの状況を認識しており、警視
庁医、京橋区医など患者を待つ病院ではなく
積極的に患者を発見し保護する社会性をもつ



公的機関の嘱託医となる。さらに、一八四
年には大日本通商衛生会を組織し、民間に「
衛生思想を普及発達せしめしむ」おもひで草
し、日ありし面影にふるほか、日千代田新聞
に「のち日千代田日報」を創刊し新聞をつ
うじくの啓蒙をはかる。

加藤は医師としての技術を備えることも忘
れずはいない。すぐに名医の定評をえつけた
が、一八八八年からドイツに留学し研鑽を積
む。そして「療痕とその手の使用能力に及ぼ

早稲田大学論文用紙

す重要性」でドイツの学位を得ている。
帰国後、一八九〇年に加藤は加藤病院を設
立する。医員四名、調剤員二名、看護人六名
の規模で、患者は外来患者が一年で延一五。
〇名前後、入院設備ももち、当時の私立病院
の平均的病院である。加藤病院は、困窮者に
は診察料を低減することとを標榜し彼の面目を
ほとんどしていた。

もっとも、加藤が本来の場々医学そのもの
の病人を救済するには今しばらくの時間を



No. 12

No. 11

必要とする。彼は日清戦争後の産業革命期に頻出する社会問題を看過しえず、ここに目をむける。加藤のこねまごの行動からみる、彼が社会問題へかかわるのは自然だが、社会問題講究会、理想団などおりからの社会問題の解決を志向する団体に参加した。

このことは加藤が衛生問題の立場・観点から都市問題へ関与したことを物語る。そもそも都市計画は貧民・富裕人の差異なくおそわれる伝染病の流行に恐懼した為政者が、その

早稲田大学論文用紙

必要を認識するところから開始されるが、加藤も同様に衛生から都市問題を考察した。ただ、加藤は「衛生を守ると云ふ事は中等以上の生活を為して居るものには困難でないが、貧乏な人達には到底出来ない」(「国民の発展」 日社会主義 〇サハ巻サ九号)と述べ、都市民衆の側から接近する点で為政者とは一線を画す。

医師加藤時次郎の主張は、森林區外が同じく医師の人命尊重の観点から市区改正と公衆衛



早稲田大学論文用紙

生の関連を論じたことと共通点をもつ。また社会問題として都市問題を考察・展開した安部磯雄や片山潜も都市の現実を鋭く批判している。だが、鷗外は国家的見地が強く、安部片山は労働者への視点をもちつつも経済的観点から都市装置を論じる。衛生面から都市問題を持続的に把握し、実践を試みた点に加藤の特徴とその意義を見出しうる。

もっとも、加藤の関心はしばらくは社会問題自体へむかう。医業と社会活動双方を行うこととなり、加藤が視野を広げ人々の直面する具体的問題を多々みた反面、衛生面からの彼本来の視点が発展させられないことでもあった。加藤が幸徳秋水・堺利彦らの週刊日平民新聞に資金援助をおこなうのは社会問題解決のための一策だが、加藤自身の積極的活動としては一丸。三年に結成した直行団がある。ここぞ彼は、様々な形態をとり出現する。社会問題の最大公約数である衣食住の貧困生活の貧困に着目し機関誌日直言を発行し



て活動をおこなう。同時に、直行団では消費組合の設立を計画、生活総体を自治的共同組織により救済しようとも試みた。

消費組合の設立は資金不足のため失敗におわるが、このうち加藤は社会主義者との接近を強める。社会問題解決への意欲がますます強まったというべきであろうが、幸徳や堺と親交をおよびたびたび経済的に援助をおこなうのみならず、一九〇六年に結成された日本社会党の顧問となる。また翌年のオニインタ

早稲田大学論文用紙

一ナニヨナルオ七回大会には同党代表として出席している。だが、こうした行動にもかかわらず加藤自身の思想としては現実の矛盾の解決を社会主義に求めず、社会改良の立場をとる。人々の生活に着目するがゆえに急激な変革を避け、政治の変革よりは具体的・日常的な場の改良に目をむける。加藤のこうした思想は大逆事件後に鮮明になる。

三、



一九一一年七月、加藤時次郎は「中等貧民
に救済のため実費診療所設立を計画した。こ
こには大逆事件が大きな影響を与えている。
加藤は処刑された幸徳秋水らの遺体解剖を試
み、遺族に援助を与え他の社会主義者との関
係も維持し、極度に活動が制限される状況下
で沈黙・韜晦せず、社会への関心を保ちつづ
ける。

だが、加藤は社会参加を社会主義者との交
流にではなく、医療活動を中心に行おうとし

早稲田大学論文用紙

た。直接社会変革を標榜するのではなく、医療
をつうじて人々の救済を試みるが、ここに大
逆事件の影響がみられる。すなわち、加藤は
医療活動に戦線を限定しつつ社会問題へ持続
してかわるが、このことは彼が一面で本業
の医療を積極的に推進したといえるものの、
他面では天皇制に関与したといわざるをえな
い。政府は大逆事件の弾圧と同時に、天皇に
「施策救済の大詔」を渙発させ「貧民救済」
政策をおこなうが、加藤はこれに触発され、



都市の「中等貧民」医療救済を試みるにいた
るのである。

加藤は「中等貧民」を、小官吏、事務員、
店員などいまだ層として形成されていない都
市新中間層に求める。加藤は彼ら「中等貧民」
を国家の基礎とし、彼らの疲弊は国家の危
機のため「せめて其疾病だけに対しても、我
業務の余力を以て幾分の便宜を与へたい」
「実費診療所開設趣意書」とした。ここに
社会改良的色彩の濃い加藤の方向が決定的と

早稲田大学論文用紙

なるのだが、(一)人々に密着した生活上の利益
を与え、(二)加藤自身にとつては今まど分離し
ていた衛生問題と都市問題とを結合させる、
という二つの意義を実費診療所の開設はもつ。
以後、加藤は都市問題を「中等貧民」救済問
題として把握し展開することになる。

こうした加藤の救済事業——実費診療所は
一九一一年九月に加藤病院の一隅に開設され
た。鈴木梅四郎の協力をえ、政界、財界、教
育界の「名士」を賛助員とし、社団法人実費



No. 22

No. 21

診療所として治療を開始する。「名士」の動力員や社団法人化は、事業経営の安定、防害に對する加藤の配慮にほかならないが、実費診療所では診療時間、治療費など患者への配慮もなされている。とくに治療費は「診察料は勿論徴収せず、薬価及び手術料は実費」(同右)とし、ここから実費診療所と命名されるのだが、当時の平均的価格に比し三分の一から四分の一の安価であった。

そのため、実費診療所は開院当日より患者

早稲田大学論文用紙

は二四、五名だが、九月末日までに二五。一名、一〇月には二六九七名(いづれも延人数)と一日平均九〇名弱の来院をみる。開院初年度へ一九一一年九月―十二月は一一万一一四〇名(実人数は一万四三九名)の患者をみ、次年度以降も一万名を固定し、一日平均五〇〇名以上の来院をえた。来院者の内訳は無職と商人が圧倒的に多く、一九一三年度はそれぞれ全体の二七・〇%、二〇・六%を占め、以下、事務員・雇人(一六・一%)、



No. 24

No. 23

職人・職工（一・二・五％）、銀行・会社員（六・一％）、官公吏（二・三％）とつづく。無職者は実際に職がない場合と秘匿している場合とが考えうるが、無職はもちろん以上の人々は独占資本主義形成期の都市で最も疲弊している人々にほかならない。都市民衆は日常生活の救済を求め、実費診療所はそれにか

く答えたのである。

患者の増加に対し実費診療所は診療時間を大幅に延長し、横浜、浅草、四谷に支部を設

早稲田大学論文用紙

置した。この発展により創設以来つづいていた欠損が一九一三年度よりは解消したのみならず、剰余までみるようになる。医員二五名、薬剤師五名、看護婦二六名（支部も含む）と規模が拡大し、診療科目も外科、皮膚科、泌尿生殖器科、整形外科、内科、産婦人科、耳鼻科、眼科、歯科と増え総合病院の体裁を整え簡便さを増し、エ線のような最新の技術も導入された。

もちろん実費診療所の発展が順調になされ



たのではない。日社団法人 実費診療所の歴史
及事業 其工口が「第四編 実費診療所に対
する開業医師団体の迫害」として七〇頁余をさ
くように、開業医の誹謗や反対運動は激烈で
あった。開業医たちの危機感は一貫して実費診療所が
いかに都市民衆に期待されたかを示すが、彼
らの攻撃により診療所の拡大は望めなくなっ
てしまう。

だが、開業医たちの攻撃は実費診療所に結
束をもたらす。(一)自力による医師の養成、(二)

早稲田大学論文用紙

機関誌「生活」の創刊、(三)来院者一
持者の組織化がある。とくに機関誌の発刊は
大きな意味をもつ。生活の力口は一九一四
年二月に総ルビつき八頁だるで月一回のち
二回、四万部を発行し、実費診療所への攻
撃に対抗すると同時に、加藤の主張・論説を
掲載し診療所が単なる病気の治療にとどまら
ず、一つの思想に基づく団体たることを来院者
に理解させる目的をもった。

加藤はこうして実費診療所の体裁を整え都



市民衆救済を実践したが、これは都市問題の解決を目ざし都市民衆の貧困を实际的・実態的に救おうとする試みである。もちろん、都市民衆救済は都市の歴史上、当期にも例をみせている。片山潜、安部磯雄や田川大吉郎、関一らの都市問題への発言には生活面から民衆を救済する視点が含まれていた。

だが、彼らの論はすべて自治体としての都市を最優先し、都市民衆の現実の困窮を個別でなく総体として救済しようとしたため、高

早稲田大学論文用紙

踏的に抽象的救済策を論ずることとなった。これに対し加藤は具体的な個人々の救済を実践し、社会事業的・都市事業的色彩が濃い。加藤は、当面自治体としての都市を抽象した地点から都市問題へ立ちむかい、都市問題全般や都市総体への眼はないものの、医学をたずさえ民衆を实际的に救済するという形態で都市問題解決への参加をおこなった。

しかも、加藤の救済事業は実利のみを与える単なる救済事業や、医療に限定されるもの



ではなかつた。彼は、「当診療の事業は病気の治療といふ唯一の事が其竟局の目的ではない。平民の口多数といふ力を種々の方面に応用して、種々の生活組合種々の救済機関を作つて見ようといふのが其根本の精神」(「平民の為に弁ず」生活の力 17号)と述べ、大平民館の建設を計画し、「平民の娯楽機関」であるものゝ、会を主催した。また、「平民の自治と団結の主張」よびかけもあつた。なる。民衆の生活と同時にその力に着目するが、権威的に上から組織せず彼らの自治心と自発性を引き出し、彼らを事業の受手、被享受者ではなく主体にすえる。加藤はこの見地から、民衆の主体性を問題にせぬ慈善と、民衆の主体性を重視する自らの事業をはつきりと区別する。

こうして加藤は民衆の自助心を尊重しその団結をはかるが、これは医療を核とし生活の様々な局面にかかわり彼らを全生活的に救いあげる、一種の共同社会の萌芽である。換言



すれば、都市問題に対しあらたな都市像を示し解決を志向する端緒である。そのため、加藤は質屋など金融問題や、電車賃をめぐる問題などの都市問題に言及する。

とはいえ、加藤の都市への発言は都市政策家たちの都市論とは異なる。都市政策家があるゆる都市問題に着目し自己の発言分野を拡大するのに対し、加藤は自己の発言領域・活動領域を限定しそこから都市問題へ対処した。加藤には本来的意味での都市経営・都市計画

早稲田大学論文用紙

などの観点から都市を把握する発想はないが、都市民衆の共生社会実現のため才一歩さふみ出したのである。明治末年から大正期にかけての都市問題皆発とその解決のための運動は社会に対する抵抗の一形態だが、これにはこうして都市政策家と加藤に代表される二様が存在していた。

さて、医療救済にとどまらず都市民衆の生活全体にかかわろうとする加藤にとり、実費診療所は何かと制約が多すぎた。そのため加



藤は、加藤病院の再編成——平民病院の設立を企及しない、一九一六年九月に実費診療所と訣別をする。みのる会と曰生活の力には加藤の手に残され、彼は自らの理想をさらにおしすすめていく。

四、

実費診療所との訣別後、加藤時次郎は生活社を結成、ここをあらたに事業母体とした。

生活社は多くの「名士」を賛助員とし、公会

早稲田大学論文用紙

堂、倶楽部、幼稚園などの施設の設置を計画、生活共同体の構築をめぐる。施設について吟味・検討はないものの、都市民衆の貧困・都市装置の不足——都市問題に対し、あらたな都市装置——施設を備えた社会構想を対置してその解決をはかる思考が加藤の才法として定着した。いまだ都市像の提出というには早過ぎるが、加藤はそれと射程に入れ、徐々に輪郭をはつきりさせ具体化を目指す。

このとき加藤の事業の中心はむしろ平民病



薬局が設置されていた。

拠点の医療設備・事業を整える一方、一九

一六年秋には平民法律所を開設し民衆の権利

へ目をむける。都市民衆は法律上の紛擾があ

っても訴訟費用が高額のため裁判で争えず、

弁護士も依頼できぬのみが法律上の相談や知

識すら覚束ない。そのため、加藤は「平民階

級の為に其権利利益を擁護し、有らゆる法律

上の顧問となり相談役となるべき一機関」(

平民法律所設立の趣旨」生活の力に才五

院である。同病院は病院名に「実費」という
救済手段ではなく、救済対象そのものの「平
民」を掲げており加藤の一層の気概まうかが
うことができるが、横浜、大阪、名古屋に分
院も設けた。平民病院は医員一〇名、調剤員
四名、看護婦一〇名の規模をもち、患者は外
来患者が延一二万名前後(年間)のほか入院
患者もあり、実費診療所とほぼ同程度の水準
を維持している。そして平民病院では加藤の
年来の主張である医薬分業が実行され、平民

早稲田大学論文用紙



ハ号)として平民法律所を設けた。社会主義
弁護士として著名であつた山崎今朝弥の助力
とあおぎ、低廉で人々の相談に応じ繁盛をす
るが、加藤の生活共同体実現へ一歩前進した
事業ではあつた。平民法律所はかつての民衆
生活の救済手段から民衆自身の権利の主張へ
と歩をすすめて、彼らに主体的に法律を利用す
る姿勢を喚起した点でも積極的意義をもつと
いえる。

加藤の民衆の権利への着目は同時に、政治

早稲田大学論文用紙

的権利としての普通選挙の要求となる。埒利
から社会主義者と協力し、資金を出し、平民
病院を普通選挙同盟会事務所に提供をする。
社会主義者との提携に附言しておけば、加藤
は大逆事件後も彼らを援助し、金銭的にのみ
ならず、日常生活の力への紙面を提供するなど
様々な点から一貫して社会主義者の保護者と
して振舞つてきつた。
さて、あらたな領域の事業にのり出した加
藤は自らの理念を金うするため、生活社を発



展的に解消し社会政策実行団を結成する。社会政策実行団は、「多数人民の生活を安全低廉にする便法」(「社会政策実行団設立成る!!」) 日生活の力(オセオ号)として一九一七年六月に発足、賛助員は三〇〇名を数えた。同団は従来にもまして生活共同体を志向し、購買組合、信用組合、低廉質屋、低廉食堂、低廉宿泊所、児童預り所、職業紹介所、低廉葬儀所、低廉助産所、低廉浴場などの設置を目ざす。生活に必要なあらゆる施設が、衣食

早稲田大学論文用紙

住、病氣や娯楽、福祉や保険の領域にまぐ及び、依然難列的とはいふものの、施設はひとつひとつが以前より吟味され提案されており、加藤の思想と計画の進展さうかがうことができる。

加藤は社会政策実行団結成いともない従来事業を拡大した。一九一七年一月一日生活の力(オセオ)と改題、翌年六月には月二回の発行としたのをはじめ、平民病院分院を駒形・渋谷に設置する。平民病院内にマッ



No. 42

No. 41

サージ学講習会を設け、みのる会の活動根拠地として平民倶楽部を建設した。これらの設備の充実・拡大は加藤の理想の進展、理想実現の意欲の旺盛さを物語るが、その最たるものは、薄給者、労働者、店員、学生等に対し、簡単にして安価なる、而も相当滋養ある食事を供給し、平民食堂開設し、平民ボヤセを号しする平民食堂の開設、低廉食堂の実現である。

早稲田大学論文用紙

ちに多く出現する簡易食堂の先駆となるが、一食一〇銭で豚汁（のち平民汁とよぶ）・飯・沢庵を供給、のちには朝食、弁当の献立もつくられた。一九一八年三月には一萬三三八七名、四月には一萬一三二名、五月には一萬五九五名と一日平均三八九名の利用者をみている。職業別内訳は、官吏・会社員・銀行員三五%、学生三二%、車夫・人夫一三%、商工業者一三%、その他六%である。病気の救済、権利の覚醒とすすめられてき



No. 44

No. 43

た加藤の事業は、日々の生活に直結する食生活にむかい食堂を経営することにより、さらに広範な民衆を集集した。ととこに、生活組合・共同体の性格をますます強めたといいうる。一九一九年に加藤は平民洋食を供給する工夫を示し、名古屋に支店を設けるなど、平民食堂は社会政策実行団の中心事業の一つとなった。

加藤は一九一九年一月に大井町に工場を建設し平民パンの製造にものり出す。一九一

早稲田大学論文用紙

三銭と決して安価とはいえないが、圧倒的に米食が多いなかで簡便に調理できるパンを供給し、かつ民衆に実利を与える事業が生産活動まご含みこむ出来事であった。生産活動は、共同生活体に単なる理念的結合でなく、具体的に高次の結合をもたうために平民パン製造は大いに評価できる。実際には、社会政策実行団では平民パン工場が中軸とならず、生産を媒介とした組合に転換しえなかつたのこはあるが。



加藤はさらに民衆の金融面における救済機
関として平民銀行設立を期すなど事業を拡大
していくが、何らかの形で社会政策実行団の
事業を利用する人々——団員は年間延二〇万
名という。加藤は事業の領域をこゝまづ拡大
し幾多の施設を設け、意識的空間を切り開き
共同社会実現の布石を敷いた。彼が働きかけ
る人々が新中間層であるため、その事業は借
地問題、市区改正など地域に密接する問題に
は対応を欠くものの、民衆を基軸にすえた創
造的な理念に基く都市問題解決実践であつた。
一九二一年九月、加藤は神奈川県に家屋一
四八戸を買収し、従来の医療、法律、食生活、
金融面の救済から住生活への救済へとむかう。
家屋を安価に提供することを中軸に、さまざま
な施設——病院、食堂、炊事場、浴場など
を備えたこの事業は平民社常知組合と命名さ
れる。加藤が唱える「中産階級」・労働者提
携論を実践することと目的とするためだが、
常知組合は彼のこれまづの実践の到達点とい



いう。すなわち、オーに労知組合は借家事業ではなく民衆への住宅供給を目的とし、最終的には彼らが住宅を取得する段取りになつてゐる。これは、日常生活のなかでもっとも手のつけにくい住宅問題解決のための試みであつた。オニに、労知組合は居住者Ⅱ組合員が文字どおりの共同生活を営んでゐた。洗濯、炊事、入浴は共同施設を利用し、組合運営は組合員の合議制でおこなわれ、月番の衛生主任、消防主任も選出された。日常、非常時の施設を備え、組合員の自治と団結にひとつく労知組合は、ひとつの共同社会であり、加藤の従来の構想の具体化にほかならないのである。加藤はさらに施設を整え、完全なる独立都市といふも不可なき期すに「理想的住宅組合」日平民Ⅱオ一五九号と述べている。

加藤は民衆生活を具体的に把握した都市民衆救済事業を実践しここに到達したが、この到達点および軌跡はひとつの都市論といひ



る。すでに述べたように、都市論といえども、れまづは行政的側面から都市制度・法体系・公営事業を重視し提出された都市構想を指す。オ一次世界大戦を契機とする都市の発展を背景に、よりよき都市経営のために発言した田川大吉郎、池田宏、関一ら都市政策家の論である。

だが、加藤の事業も都市総体に目くばりしあらたな都市建設の可能性を示唆しているのみならず、都市問題解決のために「自治」と

早稲田大学論文用紙

「都市装置」ともなえた共同社会——都市構想を提出しており、加藤は事業をつうじて都市論を唱えたといえる。もちろん加藤は理論的体系としてそれを整理しておらず、市政・税制度への言及もないが、ロバート・オーエン、シヤルル・フリーエの試みに通ずる都市計画上のさまざまな実験（L・ヴエネヴォロ日近代都市計画の起源）であった。しかるに、都市政策家が広く目配りし民衆をとりこみ様々な都市装置に言及するも、観念



としこの民衆に對し、諸外國の都市理論の日本への適要を試みたのに対し、加藤は民衆を具体的に把握し都市装置のひとつ一つの意味を問いつつこれを設置し、民衆に實利と与える自前の都市像を實踐のなかから提起した。都市政策家は都市像から都市装置を演繹して上からの都市論を展開するが、加藤は民衆の立場から都市装置を検討して下からの都市論を提唱したといえる。

賀川豊彦や山室軍平の軌跡も加藤と同様の

早稲田大学論文用紙

ものであり、従来都市史において全くとりあげられなかったが、下からの都市論は現実の都市を民衆の立場から具体的に、根底的に撃ち、あらたな都市像を提出するのである。加藤時次郎はその提唱者にほかならず、都市史上にゆるぎない地歩を占めるのである。

五、

こゝまづ紹介してきた加藤時次郎の都市論は大正デモクラシー期に唱えられ、大正デモ



クラシイの成果のひとつといいうる。大正デモクラシイは民本主義の理念のもと、政治的・社会的・市民的権利を要求する運動をうみ出したのがあった。

同時に加藤は国際問題や国内問題など政治にも発言をおこなない、国際平和や国内の社会改良を唱えている。一九二一年に上梓した日オニ維新日はその集大成で、世界の大勢が民衆によるデモクラシイを中心に動いているこ

早稲田大学論文用紙

と、日本をその影響をまぬがれることはできず、官僚・資本家・軍部による支配を改めねばならぬこと、「社会改造」の方法は温和・合理的な方法によることを主張した。「中間階級」を主体とする加藤の社会改良論は天皇制への傾斜が顕著であるものの、民衆の自治と団結に期待と信頼をよせ、この点からも加藤は大正デモクラットの一人とすることができ。ロシアの飢饉に対して「露国饑饉救済大演芸会」を開きその救済に奔走したことも



このことをうらづけている。

加藤は民衆の生活に着目するがゆえに、家庭論を展開し、婦人や子供など社会的弱者に働きかけ、「公」の領域にとどまらず「私」の領域にと積極的に発言をする。日平民団に二ページの「家庭欄」を設け、婦人の地位向上を事ごとに訴え、婦人参政権獲得運動に賛助をおこなない、結婚を論じ夫婦の平等を唱え子供に健全な娯楽を与えるためゴドモ倶楽部をつくった。

早稲田大学論文用紙

あるいは医師の立場から性病の撲滅を主張し、産児制限運動をおこなう。とくに一九二二年には石本恵吉・静枝、安部磯雄らとともに日本産児調節研究会を結成し、人々に避妊方法を教授する。こうして加藤は都市論以外の領域ごと政治や社会、家庭について人々の生活に密着した視点から論を展開し、人々があらゆる抑圧から解放されることを希求する。この加藤の主張は民衆の力への信頼と確信にもとづいておりユニークな論点さいくつ



もう出しているが、とくに日性慾と道德は
へー九二七年）では性欲を軸にした社会構想
を提出し注目される。

だが、事業が拡大し多領域に発言をおこな
う加藤に試練があらう。平民病院渋谷分院や
名古屋分院の開鎖、内部の紛争とそれによ
づく同志の離反、追いうちさがけるようにあ
つた関東大震災である。とくに関東大震災
は東京の施設こそ被害は軽微であつたものの、
横浜の施設は全滅し加藤は全事業の三分の一

早稲田大学論文用紙

以上を笑う。加えて震災後は無産者の立場を
強調する借家人組合や消費組合、政府・自治
体による住宅組合・簡易食堂・簡易宿泊所な
どが続々登場し、加藤の事業は双方に狭撃さ
れてしまふ。
このときかねてより日蓮宗への傾斜をみせ
ていた加藤は、日平民に口凡人の力と改
題しへー九二五年四月）、自由仏教団や仏教
国民同盟を提唱するにいたる。生活者として
の民衆を具体的に救済する事業から、彼らの



No. 60

No. 59

精神的救済に比重をかける。とはいえ、加藤は社会改良の立場を放棄したのではない。堺利彦とは親交を保ち、日本労働党に関与するなど社会主義者や無産政党との提携を辞さず、情況への発言も持続させている。加藤は社会の変化――無産勢力の台頭に充分対応できず、とはいえないが、都市民衆への共感を失わず、彼らを抑圧するものへの批判をつづけていく。そしてこうしたなか、一九三〇年五月三日に加藤時次郎は没した。七三才であつた。

早稲田大学論文用紙